

コードリの英語辞書 (R. Cawdrey, *A Table Alphabeticall*, 1604) 再考 (上)

三 輪 伸 春

0. はじめに

本論は、英語史上初めての国語辞書、すなわち「英語を英語で説明した初めての辞書」と考えられているコードリ の辞書 (R. Cawdrey, *A Table Alphabeticall*, 1604) を見直し、再評価することを目的とする。そのために「コードリにとっての過去（先行する辞書類）、同時代（シェイクスピアの語彙）、未来（後続する難解語辞書類と現代の辞書）から考える」という歴史的視点で考える。第一に、コードリ以前の語学学習書のグロッサリ、ラテン語辞書との比較、第二に、コードリと同時代のシェイクスピアの語彙を収録した Schmidt, *Shakespeare-Lexicon* との比較、第三に、コードリ以降の英語辞書、そして 20 世紀の学習英英辞書である *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (1974、以下 OALD) との比較という 3 つの視点から考察する。*

【本稿】

- 1) コードリと先行する語学学習書の語彙との比較
- 2) コードリの辞書に収録されたギリシア語の意味
- 3) コードリと OALD の掲載の語彙の比較

【以下、続稿】

- 4) コードリとその後の英語辞書における語彙との比較
－「難解語」の変容－
- 5) コードリとシェイクスピアの語彙との比較⁽¹⁾
- 6) OED にみられるコードリからの引用の問題点⁽²⁾

1. コードリと先行する語学学習書のグロッサリとの比較

英語を英語で説明した辞書が必要であるというマルカスター (R. Mulcaster, *The first part of the elementarie...*, 1582) の要請に応じて、語学学習書の一部としてのグロッサリから独立した、初めての英語辞書として編纂出版されたのが、ロバート・コードリ (Robert Cawdrey) であった。

16 世紀末までにラテン語辞書、フランス語辞書が大いに発展したのは、イギリスに大陸から異民族が間断なくやってきたというブリテン島の歴史、更にはラテン語、フランス語が絶え間なく流入し続けたためである。特に、フランス語辞書が発展したのはノルマンコンクエストの大きな影響のためである。外国語辞書が顕著に発展し続けるうちに英語辞書編纂への機運が高まってきた。外国語一英語辞書から英語を英語で説明した辞書へと発展することは英語辞書誕生へのひとつの大きな契機であるが、さらに、英語そのものへの意識の高まりも見逃すことができない。英語辞書編纂へ導いた、自国語としての英語への意識の高まりの要因は次のような事が考えられる。まず、外国語と比べた場合、英語の綴り字の余りな不規則性をなんとかしなくてはいけないという気運。第 2 には、ラテン語、フランス語の言語としての優越性を熟知している学者達が抱いていた、はたして英語という言葉が書き言葉として成立しうるのかという懸念に由来する英語への関心。第 3 には、伝統的に必修教科の位置を保ってきたラテン語が実用的ではないという理由で、小学校、ついでグラマースクールに実用的な英語が教科として取り入れられ、教科としての、正確な英語を学習する必要性が生じたこと。第 4 に、商業取引の必要から、スペイン語、イタリア語、フランス語と英語の辞書が出版されたことから生じた自国語への関心。そして、第 5 に、英語本来語ではなく、ヨーロッパ大陸の諸言語からの無数の、難しい借用語の流入。このような気運のもと、マルカスター、クート (E. Coote, *The English School Maister*, 1596, 約 1500 語) により英語辞書編纂への素地が準備され、ともかくも、初めて英語を英語で説明した独立した形態の辞書が出版された。それがコードリの *A Table Alphabeticall* (1604) である。

ラテン語辞書、フランス語辞書が相当に大部になっていたので、八つ折り版(8vo)で、120 頁、総語彙数 2,500 ～ 3,000 のコードリの辞書は随分と小さく感じられる。ラテン語辞書が、OE 期の行間注釈、語彙集に始まって以来、長い年月をかけ、伝統を積み重ね、編纂技術も発展し、徐々に語彙数を増してきた末にやっとトマス・トマス (Thomas Thomas, *Dictionarium Linguae Latinate et Anglicanae*, 1587, 約 3 万 7 千語)、クーパー (Thomas, Cooper, *Thesaurus Romae & Britannicae Anglicanae*, 1565, 約 3 万語) の辞書に至ったのと同じ経過を英語辞書が辿ったと考えれば、一番最初の英語辞書であるコードリの辞書が、OE 期のラテン語語彙集と同じ程度であるとしても無理のないことである。以後、英語辞書はラテン語辞書編纂の技術を受け継いで発展してゆく。

コードリの辞書のタイトルページは以下のようにになっている。

A Table Alphabeticall, conteyning and teaching the true vvriting, and vnderstanding of hard vsuall English wordes, borrowed from the Hebrew, Greek, Latine, or French. &c.

With the interpretation thereof by *plaine English words, gathered for the benefit & heple of Ladies, Gentlewomen, or any other vnskilfull persons.*

Whereby they may the more easilie and better vunderstand many hard English wordes, vvhich they shall heare or read in Scriptures, Sermons or elsewhere, and also be made able to vse the same aptly themselues. AT LONDON, (...) 1604.

このタイトル頁に見られる、「ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語、フランス語、から借用された外来語で、日常使用される難解語 (hard vsuall English wordes)」⁽³⁾を「易しい英語で解釈する」という方針はコードリ以降の難解語辞書の伝統となり、この種の辞書を「難解語辞書」と呼ぶ。「貴婦人」のためというのは、当時の教育制度では教育を受けられなかった婦

女子のためということであり、この宣伝文句も難解語辞書のうたい文句となった。しかし、このタイトルページにも先行する語学学習書の影響が色濃く見出される。例えば、クートのフランス語学習書のタイトルページを比べてみれば、クートがコードリに与えた影響の大きさは明らかである。

THE ENGLISH SCHOOLE MAISTER, (...) And further also teacheth a direct course, how any vnskilfull *person may easily both understand any hard english words, which they shall in the Scriptures, Sermons, or elsewhere heare or reade:* (...)

(Coote, *The English Schoole Maister*, 1596, 南雲堂版)

「語学未熟者が英語の難解語をやさしく理解するため (any vnskilfull person may easily both vnderstand any hard english words, ...)」といううたい文句からもコードリがクートの影響下にあったことは確実である。コードリの語彙数約 2,500 のうち 50% はクートの語彙集からそのまま借用し、40% はトーマスのラテン語辞書から借用した (Starnes & Noyse, 1946, 1991², pp.15-6)。試みに、クートの語彙集の A の項目の中でギリシア語を語源とする単語とコードリの辞書の A の項目の中でギリシア語を語源とする単語とを比べて、両者の語義記述の様子を見てみる。

Coote

agonie g. heaue passion.

allegorie g. similitude.

alpha g. the first Gréeke letter.

alphabet g. order of letters.

Cawdrey

agonie, (gr) heaue passion, anguish, grieve

allegorie, (gr) similitude, a mysticall speech, more then the bare letter

alpha, (gr) the first Gré eke letter

alphabet, (g) order of letters in the crossrow.

anatomie g. cutting vp.	anatomie, (g) cutting vp of the body.
anathema g. accursed.	anathema, (g) accursed or giuen ouer to the deuill.
antichrist against Christ.	antichrist, (g) against, or contrarie to Christ.
aphorisme generalle rule.	aphorisme, (g) generall rule in phisick
apocalypse reuelation.	apocalipse, (g) revelation.
apostate g. a backslider.	apostotate, (g) a backslider.

コードリはクートの定義をそのまま借用して済ましている場合もある（例、alpha）が、多くは類義語を追加している（例、allegorie）。また、クートの語彙集は、教義問答、祈祷書、文法の用語が中心であり、いささかたよっていたので、その点はコードリが補充している（例、analysis, analogie）。単純に表現すれば、コードリは、クートから 50% を借用し、トーマスから 40% を借用して、融合合体させて自分の辞書を編纂したと言えよう。

要するに、コードリは、先行する語学学習書とそのグロッサリを従来の習慣に従って十分に活用して自分の語彙集を編纂した。その意味では、コードリの内容は従来の語学学習書の一部をなすグロッサリの域を出ていないと考えられる。

コードリの辞書は 4 版を重ね、第 3 版ではタイトルに“much enlarged”の文字が加えられ、最後の第 4 版（1617）はその前年に出版されたブロカー（John Bullokar）の *An English Expositor* の書名を真似て *A Table Alphabeticall, or the English Expositor* となったがいずれも内容上の重要な変化はない。

2. コードリの辞書に収録されたギリシア語の意味⁽⁴⁾

16 世紀半ば過ぎると、ルネッサンスの運動の影響が行き渡り、ラテン語、フランス語はもとより、ギリシア語もそれ程違和感なく英語に導入されるようになってきた。そこで、17 世紀初めに出版されたコードリの *Table* にどの

程度のギリシア借用語が収録されているのか、収録されているギリシア借用語の特色はなにか、また、コードリに収録されているギリシア借用語がその後の英語辞書ではどのように扱われているのかを検討することにより、コードリの辞書における外来語の特色を検討し、コードリの辞書の性格を明らかにする。

Table に収録されているギリシア借用語 (g, gr で示されている) の総数は 214 語で、アルファベット順の収録語彙数は以下のようである。

A-32	B-4	C-25	D-13	E-24	G-6
H-13	I-3	L-2	M-23	N-3	O-7
P-33	R-3	S-14	T-8	Z-1	
総計	214 語				

これらのギリシア借用語は、17 世紀の当時は難解語であった。しかし、今日では日常用語となっている語が多い。I と L の項に収録してある語すべてを例に取ってみる (5 語)。

Idiome, (g) a proper forme or speech:
 idiot, (g) vnlearned, a foole
 ironie, (g) a mocking speech
 lethargie, (g) (k) a drowsie and forgetfull disease.
 logicall, (g) belonging to reason

【(k) は a kind of を示す。idome は I の項目の最初の語であるから語頭が大文字になっている】

これらの 5 語は、基本語彙 5 万 6 千語を収録し、学習辞書とみなされている。LDCE (*The Longman Dictionary of Contemporary English*, 1987) にも収録されていることから分かるように、いずれも我々にとって馴染みのある語である。しか

し、当時は、難解なギリシア語という印象を与えたことであろう。今日でも、事態は大差ない。馴染みがあり、日常生活上、必要に応じて使用する単語であるが、英語らしくない難しい外国語であるという印象に変わりはない。

コードリの辞書に収録された語彙がギリシア語からの難解な語彙にもかかわらず、現在までも日常的に用いられている理由は、外国語とはいえ当時既に日常的に用いられていた語だからである。その証拠に、当時広く普及していたクートに代表される学習書の語彙集やトーマスを代表とするラテン語＝英語辞書に繰り返し掲載されている語がほとんどである。そして、コードリ以降の辞書にも引き続き掲載され続けるのである。コードリがその辞書編纂に際して収録しようと意図した語は、当時既に日常的に用いられていた語である。そのことはコードリの辞書のタイトルページを見れば分かる。

A Table Alphabeticall, conteynyng and teaching the true vvriting, and vnderstanding of hard vsuall English wordes, borrowed from the Hebrew, Greeke, Latine, or French. &c.

With the interpretation thereof by plaine English words, gathered for the benefit & helpe of Ladies, Gentlewomen or any other vnskilfull persons...

(Cawdrey, 1604, タイトル頁)

この文句の中で、「日常生活に使われる難解な英語 (hard vsuall English wordes)」、つまり、「難解ではあるが英語になっている語」という表現には注意を要する。コードリの意図は、あくまでも日常生活に用いられ (vsuall)、英語に組み入れられている単語 (English wordes) を収録し、外国語を全く知らない人たち (vnskilfull persons)、上流階級といえども教育を受けられなかった婦人達の便宜を考えていたのである。コードリのタイトルページにあるこれらの文句は文字通りに受け取るべきであり、その意図と努力の成果は辞書本体に十分反映されていると評価することができる。また、コードリの「序文」も、彼の意図を反映してきわめてやさしい文章で書かれている。

By this Table (right Honourable & Worshipfull) Strangers that blame our tongue of difficultie, and vncertaintie may heereby plainly see, & better vnderstand those things, which they haue thought hard

(Cawdrey, 1604, タイトル頁から3頁目)

コードリ以降の難解語辞書は、コードリの意図とは逆に、争って難しい外来語を数多く収録するようになり辞書は肥大化の一途を辿り、一般の人々には縁遠くなっていった。掲載された語も、難解語が多くなっていった。「序文」も辞書の内容に比例して難解になっている。例えば、コケラム (H.Cockram, *The English Dictionarie or An Interpreter of Hard English Words*, 1626) の辞書のタイトル頁からは、*usual* という文字が消え、「序文」も難解になっている。

Part of every desertful birth, (Right Honourable) in any man his Country may challenge, his Soueraigne a part, his Parents a part, & his freinds another. As I cannot be vsefull in euery respect to each of those, so I will strive to expresse at least a will, if not a perfection in abilitie to all.

(H. Cockram, 1626, 序文)

最初の辞書コードリと2番目以降の辞書、ブロカー、コケラムとはどういう違いがあるのか。

実は、辞書というものに関する認識がまったく異なるのである。コードリの辞書は、伝統的な語学学習書の一部をなしていたグロッサリを何らかの都合でたまたま独立したブックフォームに仕立てたにすぎないと考えられる。何らかの都合というのは、例えば、ポールズグレイブ (Palsgrave, *Lesclarcissement de la langue francoyse*, 1530) に見られるように、文法の部分、会話の部分、グロッサリの部分それぞれが分量を増やし続けて語学学習書が徐々に大きく大部となり、製本・印刷も手間暇がかかり、読者にとっても扱

いにくくなったので分冊にしたという事情が考えられる。

辞書というのは外国語を説明したものであって、英語を英語で説明したものは語学学習書についている単語集（グロッサリ）である、というのが当時の認識であった。というより、両者はまったく別の範疇に属していたのである。現在のわれわれが、日本語の国語辞書と英語関係の辞書とを、形は似ているがまったく別物と認識し、編者も出版社も、出版形態もまったく異なるのと同じような状況であった考えればいだろう。従って、コードリには「この書物は辞書である」という認識はまったくなかった。まして「この書物が英語史上初めての英語辞書になる」という認識はまったくなかった。つまり、16世紀の辞書のパラダイムには「辞書というのは外国語辞書」であり、「英語を英語で説明した (monolingual) 辞書」という概念はなかった。従って、辞書編纂学として考えた場合、コードリが後世へ与えた影響は辞書そのものの実質的部分ではなく、むしろ、コードリ自身意識していなかったが、それまでに存在しなかった「語学学習書から独立した形態を持った、英語を英語で説明した単一言語 (monolingual) 辞書」という範疇を誕生させたことが重要なのである。

コードリ以前には存在しなかった、独立した形態の英語辞書の出現により、初めて「英語を英語で説明する書物が辞書としてありうる」と認識されたことが、1616年出版のプロカーと1623に出版されたコケラムの辞書の書名に見出すことができる。すなわち、プロカーの辞書からはコードリの辞書のタイトルにあった「日常使われる (usual)」という語が消え、hard が hardest に変えられている (J. Bullokar, *An Expositor: teaching the interpretation of the hardest words used in our language*,...,1616)。さらにコケラムでは、*Dictionarie* という語が英語辞書に初めて冠せられ、語学学習書から脱皮し、独立した範疇を確立したことが明確に意思表示されている (*The English Dictionarie: or an Interpreter of hard English Words*. 1623)。

初心者用の語学学習書につけられたグロッサリであれば、どのグロッサリも似たようなやさしい語を繰り返し収録するだけであるが、一旦「辞書」と

して認識されると難解な語を説明するという明確な意図が生じる。コードリの辞書に掲載された語は、もともと語学学習書のグロッサリと同じ性格であるために、外来語とはいえ日常基本語に溶け込んでいた語のみが収録されているのに反し、ブロカー、コケラム以降の辞書が難解語辞書として急成長してゆく理由はここにある。従って、コードリを難解語辞書としてみると、そこに収録されている語を現在のわれわれにとっては比較的基本的語彙なのにといぶかしく思うのも当然である。コードリに掲載されている「難解語」が現代までに英語の日常語になったのではなく、コードリの時代までにすでにある程度日常生活で用いられるようになっていた外来語を語学学習書の伝統に従ってコードリが収録したのである。コードリが難解語として収録した語が現在までに日常語になったと考ええると、コードリの先見の明はきわめて卓抜であったことになるが、コードリに収録された語彙を、先行する外来語辞書、語学学習書、シェイクスピアが用いた語、OALD に収録されている語と比較検討すると、コードリの辞書が難解語辞書でないことが理解できる。

3. コードリと OALD の掲載の語彙の比較

コードリの辞書に掲載されている単語と 50,000 語を収録している現代の学習辞書 *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (1974, OALD) を比較することで、コードリの辞書の性格を明らかにする。特に、コードリは意味を簡明に、かなり幅広く記述している。コードリに用いられている記号は、§= フランス語起源, (g), (gr)= ギリシア語起源, (k) は kind of の短縮記号(本稿では省略)。Schmidt は参考のために補充。なお、OED、Schmidt、OALD からの引用は関連する部分のみである。形態変化、意味変化についての要点のみ引用。

1. §abandon

Cawdrey cast away, or yelde up, to leave, or forsake.

Schmidt 1) to leave .

2) to desert, to forsake.

3) to give up, to renounce.

OALD *vt* 1 go away from, not intending to return to; forsake.

2 give up

n 1 careless freedom, as when one gives way to impulses.

OED *v* I . To give up absolutely.

2. To give up the control or discretion of another; to leave to his disposal or mercy; to yield, cede, or surrender absolutely a thing *to* a person or agent. *c*1386~1849

†3. To sacrifice, devote, surrender. *Obs.* *c* 1450~1718

4. *refl.* To give oneself up without resistance, to yield oneself unrestrainedly--as *to* the mastery of a passion or unreasoning impulse. 1564~1879

7. To let go, give up, renounce, leave off (a possession, habit, practice, pursuit); to cease to hold, use, or practise. 1393~1879

8. To forsake, leave, or desert (a place, person, or cause); to leave without one's presence, help, or support. 1490~1879

III . To let loose.

IV . To banish.

†11. To put to the ban, interdict, proscribe, banish: *fig.* to expel, cast out, reject. *Obs.* 1548~1660

3 冊の辞書で「あきらめる、その場から立ち去る」という意味が共通する。

2. abash

Cawdrey *blush.*

Schmidt **Abashed**, made ashamed

OALD *vt* cause to feel self-conscious or embarrassed.

- OED v. **1.** To destroy the self-possession or confidence of (any one), to put out of countenance, confound, discomfit, or check with a sudden consciousness of shame, presumption, error, or the like.
- a.** *active.* 1375~1863
- b.**
- c.** Most common in the *passive*: to be, stand, or feel abashed; at an occasion, *of (obs.), by* a cause. *c* 1325~1876

どの辞書にも掲載されている定義は「恥ずかしい」で共通する。

3. abba

Cawdrey father.

Schmidt 記載なし

OALD 記載なし

- OED [An Aramaic word, Chal. *abbâ*, Syr. *abbâ* or *abbô*, the father, or O father.]
Being retained in the Greek text of the N.T., and the versions, along with its transl. *father*, the combination, *Abba, father* is used by writers as a title of invocation to the first person of the Trinity. Also a title given in the Syriac and Coptic churches to bishops, and by bishops to the patriarch: father, religious superior. 1382~1719

Schmidt, OALD には、abbot(the governess of a nunnery) の記載はあるが abba はない。

4. §abbesse

Cawdrey abbatesse, mistris of a nunnerie, comforters of others.

Schmidt the governess of a nunnery .

OALD **abbess** *n* woman (Mother Superior) at the head of a convent or nunnery

OED **abbess a.** The female superior of a nunnery convent of women, having the same authority over nuns that an abbot has over monks. 1297~1859
意味変化なし。

5. §abettors

Cawdrey counselors.

Schmidt instigator.

OALD **abet** *vt* [VP6A,14] (legal) help (sb) (*in* doing wrong); encourage (vice, crime)

OED **1.** *Law and gen.* One who abets, instigates, or encourages to the committing of any offence. 1514~1856

2. *gen.* One who encourages, countenances, or supports another in any proceeding; one who supports or advocates an opinion or principle; a supporter, adherent, advocate. (Prob. Never now used in a distinctly *good* sense, as in 17th c.) 1580~1855

コードリと Schmidt, OALD では一見異なる意味が記載されている。OED にはその両方の定義と取れるものが書かれており、さらにコードリが定義した *counselor* といういい意味では、現代においては使用されていないと書かれている。従って、これら二つの意味は同時期に共存していたことになるが、コードリの *Table* の定義は *Table* 以前の Coote, Thomas の定義の影響を強く受けていることを考えると、Schmidt の方が当時使われていた意味に近いものを記載していると考えることができる。

6. aberration

Cawdrey a going a stray, or wandering.

OALD *n* **1.** (usu fig) straying away from the right path, from what is normal.

2. instance of this; defect

OED **3.** A wandering from the path of rectitude, or standard of morality; moral irregularity. 1594~1869

Schmidt に記載なし。基本的な意味は変わっていないが、現代では若干意味が広がっている。コードリの辞書の時代から使われている意味は、現代においても使われていることが OED より分かる。また、コードリは大枠の意味を示している。

7. abbreviate, §abbridge

Cawdrey to shorten, or make short.

Schmidt **Abbreviate**, to abridge, to reduce to a smaller form (used only by Holophernes)

Abridge 1) to shorten (used of time) 2) With *from*, to cut off from, to curtail of

OALD **abbreviate** *vt* shorten (a word, title, etc.)

abridge *vt* make shorter, esp by using fewer words → abbreviate

OED **abbreviate**

3. trans. To shorten by cutting off a part; to cut short. **a.** Of time. *arch.* 1529~1646 **b.** Of any operation occupying time. 1494~1865 **c.** Of things material; mostly *fig. arch.* 1552~1661 **d.** Of words spoken or written, or symbols of any kind: To contract, so that a part stands for the whole. The common *mod. use.* 1588~1880

abridge 1. To shorten; to make shorter, to cut short in its duration, to lessen the duration of. Originally of time, or things occupying time. 1340~1834

2. a. To make shorter in words, whilst retaining the sense and substance; to condense, epitomize. 1393~1863

4. To cut off, cut short; to reduce to a small size. Now *rare* of things material. c1420~1822

5. To curtail, to lessen, to diminish (rights, privileges, advantages, or authority). 1393~1853

6. With a person:--Const. of, rarely *from*, *in*. To stint, to curtail in; to deprive of; to debar from. 1303~1839

大きな意味変化はないが、当然のことながら現代に近づくにつれて単語の用途が広がっている。

8. §abbut

Cawdrey to lie unto, or border upon, as one lands end meets with another .

Schmidt **Abut**, to be contiguous, to meet

OALD **abut** *vi* [VA3A] ~ on, (of land) have a common boundary with; border on.

全ての辞書を通して「境目、境界」という意味が一貫している。

9. abecedarie

Cawdrey the order of the Letters, or hee that breth them.

Schmidt **ABC**, the alphabet

OALD **ABC** *n* **1** the letters A to Z of the (Roman) alphabet. **2** simplest facts of a subject, to be learnt first.

OED **abecedary** **A.** *adj.* **1.** Of or according to the alphabet; alphabetic; marked with the alphabet; arranged in alphabetical order. 1580~1803

ラテン語借用。意味変化なし。

10. aberration

Cawdrey a going astray, or wandering.

OALD *n* **1** (usu fig) straying away from the right path, from what is normal. **2** instance of this; defect

OED **3.** A wandering from the path of rectitude, or standard of morality; moral irregularity. 1594~1869

aberration は全く同じ記述で2回掲載されている。同じ単語、同じ意味。Schmidtに掲載なし。

以下、コードリに掲載されたすべての語彙を調査してあるが本稿では紙幅の関係でAの項目のみを挙げる。○印は、Schmidtの *Shakespeare Lexicon*、OALDに掲載されている語。×印は掲載されていない語。△印は、形態・意味が多少異なるが同じ語と認められる語。

	Cawdrey	Schmidt	OALD	備 考
1	abandon	○	○	
2	abash	○	○	
3	abba	○	○	
4	šabbesse	○	○	
5	šabbesse	○	○	
6	aberration	×	○	
7	abbreviat,	○	○	
8	šabbridge	○	○	
9	šabbut	○	○	
10	abecedarie	○	○	
11	aberration	×	○	6と重複
12	šabet	○	○	
13	abdicate	×	○	
14	abhorre	○	○	
15	abiect	○	○	

16	abiure	○	○	
17	abolish,	×	○	
18	abolited	×	×	
19	§abortiue	○	○	
20	abricot	○	○	
21	abrogate	○	○	
22	abruptly	○	○	
23	absolue	○	○	
24	absolute	○	○	
25	absolution	○	○	
26	abstract	○	○	
27	absurd	○	○	
28	academie	○	○	
29	academicke	×	○	
30	accent	○	○	
30	accept	○	○	
31	§acceptace	○	○	
32	accesse	○	○	
33	§accessarie	○	○	
34	accessorie	○	○	
35	accident	○	○	
36	accidentall	○	○	
37	accomodate	○	○	

38	§accomplish	○	○	
39	accommodating	×	○	
40	§account	○	○	
41	§accord	○	○	
42	accurate	×	○	
43	§accrew	○	○	
44	acertaine	×	○	
45	acetositie	×	×	
46	§achieue	○	○	
47	§acquitall	△	○	
48	acquisition	○	○	
49	§action	○	○	
50	actiue	○	○	
51	actuall	○	○	
52	acute	○	○	
53	adage	○	○	
54	adamantine	○	○	<i>adamant</i>
55	addict	○	○	
56	adherent	△	○	Schmidt は <i>adhere</i> のみ
57	§adiew	○	○	
58	§adresse	○	○	
59	adiacint	○	○	
60	adiunct	○	○	

61	§adiourne	○	○	
62	adiure	×	○	
63	administer	○	○	
64	administrator	△	○	
65	admire	○	○	
66	admiration	○	○	
67	§admirall	○	○	
68	admission	○	○	
69	adopt	○	○	
70	§adore	○	○	
71	adorne	○	○	
72	§aduauunce	○	○	
73	aduent	×	○	
74	aduerse	○	○	
75	§aduertise	○	○	
76	adulation	○	○	
77	adulterate	○	○	
78	aduocate	○	○	
79	§aduouision	×	×	
80	adustion	×	×	
81	affable	○	○	
82	§affaires	○	○	
83	§affect	○	○	

84	affected	○	○	
85	affinitie	○	○	
86	affirme	○	○	
87	§affiance	○	○	
88	§affianced	○	○	
89	§affranchise	×	×	
90	agent	○	○	
91	aggrauate	○	○	
92	agilitie	×	○	<i>agility</i>
93	agglutinate	×	○	
94	agnition	×	×	1569-1775(OED)
95	agitate	○	○	
96	agonie(g)	○	○	
97	§aigre	○	○	<i>eager</i> , 15-16c の綴り, 16c 以降 <i>eager</i>
98	akecorne	○	○	Schmidt, <i>acorn</i>; ake- は 16-17c の綴り
99	alacritie	×	×	
100	alablaster	○	○	
101	alarum	○	○	
102	alchimie	○	○	
103	§alien	○	○	
104	§alienate	×	○	
105	all haile	○	○	all hail
106	alledge	○	○	

107	allegation	○	○	
108	allegorie(gr)	×	○	
109	§allegiance	○	○	
110	alienate	×	×	
111	§alliance	○	○	
112	allusion	○	○	
113	allude	×	○	
114	aliment	×	○	
115	alpha(gr)	×	○	
116	alphabet(g)	○	○	
117	altercation	×	○	
118	altitude	○	○	
119	amaritude	×	×	
120	ambage	×	×	
121	§ambassador	○	○	
122	ambition	○	○	
123	ambodexter	×	×	OED, <i>ambidexter</i>(1532-1809); OALD, ambidexterous
124	ambiguous	○	○	
125	§ambushment	×	×	Schmidt, OALD, <i>ambush</i>
126	§amerce	○	×	
127	amercement	×	×	
128	amiable	○	○	
129	amitie	○	○	

130	amorous	○	○	
131	šamorte	○	○	
132	amplifie	○	○	
133	analogie(gr)	×	○	
134	analis(is)(gr)	×	○	
135	anarchie(gr)	×	○	
136	anatomie(g)	○	○	
137	anathema(g)	×	○	
138	anchove	○	○	<i>anchovy</i>
139	šangle	○	○	
140	šanguish	○	○	
141	angust	×	○	OALD, <i>angst</i>
142	animate	×	○	
143	animaduersion	×	○	
144	annalis	○	○	
145	annex	○	○	
146	annihilate	×	○	
147	anniversarie	×	○	
148	annuall	○	○	
149	anthem	○	○	
150	anteccessor	×	×	
151	antichrist(g)	×	△	
152	anticipation	○	○	

153	antidote(g)	○	○	
154	§antidate	×	×	
155	antipathie(g)	○	○	
156	antiquitie	○	○	
157	anticke	○	○	
158	antithesis(g)	×	○	
159	antiquarie	○	○	
160	annotations	×	○	
161	anxitie	×	○	
162	aphorisme(g)	×	○	
163	apocalypse(g)	×	○	
164	apocrypha(g)	×	○	
165	apologie(g)	○	○	
166	apostotate(g)	×	×	
167	apostacie(g)	×	○	
168	apostle(g)	○	○	
169	Apothegme(g)	×	○	
170	apparent	○	○	
171	appall	○	○	
172	apparition	○	○	
173	§appeach	○	×	
174	§appeale	○	○	
175	§appease	○	○	

176	appendix	○	○	
177	appertinent	○	○	
178	appurtenance	×	○	
179	appetite	○	○	
180	applause	○	○	
181	application	○	○	
182	appose	○	○	oppose の異形
183	apposition	×	○	
184	apprehension	○	○	
185	approbation	○	○	
186	appropriate	×	○	
187	approue	○	○	
188	approch	○	○	
189	apt	○	○	
190	arbiter	×	○	
191	arbitratour	○	○	arbiter, arbitratour は併置して1語扱い
192	§arbitrement	○	×	
193	arch(g)	○	○	
194	arch. angell(g)	○	○	
195	archbishop	○	○	
196	architest	○	○	
197	ardent	○	○	
198	ardencie	×	×	

199	argent	○	○	Schmidt, <i>argentine</i>
200	argue	○	○	
201	ariditie	×	○	
202	aristocraticall(g)	×	○	aristocratic
203	(g)arithmeticke(g)	○	○	arithmetic
204	arke	○	○	
205	§armorie	○	○	
206	§arrerages	○	×	
207	arrest	○	○	
208	arride	×	×	
209	§arive	○	○	
210	arival	○	○	
211	arrogate	×	○	
212	arrogant	○	○	
213	artifice	×	○	
214	artificer	○	○	
215	artificially	×	○	Schmidt, <i>artificial</i>
216	articulate	○	○	
217	artichock	×	○	
218	§artillery	○	○	
219	ascend	○	○	
220	ascent	○	○	
221	ascribe	○	○	

222	askey	×	×	
223	asquint	○	×	askey, asquint は併置して同一語扱い
224	§assay	○	○	
225	assent	○	○	
226	assertaine	×	○	
227	assentation	×	×	
228	aspect	○	○	
229	aspectable	×	×	
230	asperat	×	×	
231	asperation	×	×	
232	aspire	○	○	
233	§assault	○	○	
234	§assaile	○	○	
235	§assemble	○	○	
236	assenblie	○	○	
237	assent	○	○	
238	assertion	×	○	
239	asseveration	×	○	
240	assiduitie	×	○	
241	assigne	○	○	
242	assignation	×	○	
243	assimulate	×	○	
244	assistance	○	○	

245	assotiation	×	○	
246	associate	○	○	
247	§assoyle	×	×	
248	astipulation	×	×	
249	astrictive	×	×	
250	astringent	×	○	
251	astronomie(g)	○	○	
252	astrologie(g)	×	○	
253	astrolabe(g)	×	○	
264	atheist(g)	×	○	
255	atheall	×	×	
256	atheisme(g)	×	○	
257	§attach	○	○	
258	§attaint	○	×	
259	§attainder	○	○	
260	§attempt	○	○	
261	attendance	○	○	
262	attentive	○	○	
263	attenuate	×	○	
264	attest	○	○	
265	attrap	×	×	
266	attribute	○	○	
267	avarice	○	○	

268	auburne	○	○	
269	audience	○	○	
270	audacious	○	○	
271	auditor	○	○	
272	audible	○	○	
273	auer	○	○	
274	auert	○	○	
275	augment	○	○	
276	auguration	×	×	
277	§avowable	×	×	
278	§avouch	○	○	
279	auoke	×	×	
280	austere	○	○	
281	authentically(g)	○	○	<i>authentic</i>
282	autumne	○	○	
283	axiome(g)	×	○	
284	ay	○	○	
285	azure	○	○	

この表からわかることは、コードリの A の項目に収録されている全部で 285 語のうち、Schmidt にも掲載されている語は 193 語、OALD は 248 語である。以下の表は残存率を示す。

辞書	Cawdrey	Schmidt	OALD
共通する語彙数	285 (総語彙数)	193	248
	100%	67.7%	87.0%

この表から以下のことがわかる。第一に、コードリの A の全語彙数 285 のうち、現代英語の基本語彙 5 万語収録の OALD における残存率が 87.0%であるのはきわめて高い残存率であるといえる。コードリの Table に掲載されている単語は、当時すでに英語に溶け込み、日常生活で頻繁に使われていた外来語であることがわかる。第二に、三冊の辞書の定義は似ているものが多い。ほとんどの単語は大きな意味変化をしていない。第三に、コードリの Table に載っている定義は簡潔で、厳密ではないが Schmidt や OALD の定義の全てを含むような記述をしていることが多い。第四に、Schmidt と OALD に収録されているかどうかを比べてみると、Schmidt はもともとは学術的な用語であるとはいえ日常生活によく用いられる語を収録していない傾向がある。例えば、academic, allegory, alpha, alteration, agglutinate, agility, accurate, analogy, analysis, anarchy, angst, animate などは OALD には収録されているが Schmidt には収録されていない。このことが Schmidt の残存率を低くしている。シェイクスピアは学術的な外来語は用いず、教養のない観衆にもわかる程度の外来語しか用いていない。言葉を変えると、外来語ではあるが、英語の単語とよく似た短い語形を持ち、外国語から借用されて以来長い間に英語国民の間に浸透していた本当になじみのある外来語しか用いていない。シェイクスピアは、短い語形であり、かつ古い時代に借用されて英語に溶け込んでいたために、イギリスの一般民衆はその語を外来語と認識していなかった語彙のみを用いる傾向があると考えることができる。

結論

コードリの *Table* は、その全てが外来語・借用語を扱った辞書である。従来、*Table* は序文にある “hard usual words” のうちの “hard” にのみ注目して「難解語」が掲載された「難解語辞書」とみなされてきたが、実は注目すべきは “hard usual words” の “usual” という語である。本論では、この辞書が決していわゆる難解語のみを扱った辞書ではないことを証明してきた。

コードリの辞書に掲載されている単語は、同時代に活躍し、一般大衆に向けた作品を多く書いたシェイクスピアに頻繁に用いられている。このことを Schmidt の *Lexicon* と OALD を用いて証明してきた。一般庶民にも理解できるような単語を用いたシェイクスピアが頻用していたということは、当時の日常会話の中で一般庶民の間で頻用されていた証拠になる。また、コードリの辞書の語彙には、外国人の第二言語習得のための現代辞書の OALD に重複するものも多い。つまり、コードリの辞書に掲載されている単語は、日常生活の基本になるような、基本的な単語なのである。

一般的にコードリは、難解辞書の編纂をしたとされているが、コードリが意図していたのは、教育を受けることのできなかった人々や、初学者のための辞書であったのである。コードリの辞書が外国語学習の初心者や教育を受けることのできなかった人々を意図したものであったことはコードリの序文からはっきりと読みとることができる。以下の引用文は、コードリの “*To the Reader*” と題したまえがきの最後から二つ目の段落である。

If thou be desirous (gentle Reader) rightly and readily to vnderstand, and to profit by this Table, and such like, then thou must learne the Alphabet, to wit, the order of the Letters as they stand, perfecty without booke, and where euery Letter standeth: as (b) neere the beginning, (n) about the minddest, and (t) toward the end. Nowe if the word, which thou art desirous to finde, begin with (a) then looke in the beginning of this Table, but if with (v) looke towards the end.

Againe, if thy word beginne with (ca) looke in the beginning of the letter (c) but if with (cu) then looke toward the end of that letter. And so of all the rest. & c.

この文の「読者がこの辞書を活用したいのならまずアルファベットを完全に習得しなさい。アルファベットの b で始まる語はこの辞書の始めの部分にある。また、n で始まる単語は中程にある。a で始まる語は最初の部分、v で始まる語は終わりの部分を見なさい。ca で始まる語を探すときは、c の項の始めの部分、cu で始まる語は c の終わりの方を見なさい。云々」という内容は明らかに初心者を用意して書かれており、従って、学識者を念頭に置いた難解語辞書とはいえないだろう。

本論は、コードリの辞書の性格を見直し、再評価することを目的する。コードリの語彙と先行する語学学習書の語彙との比較、コードリの語彙とシェイクスピアの語彙との比較、コードリの語彙と OALD の語彙との比較検討のための作業の一環であるが方向性を示しただけでまだ試論の域を出ない。精密な分析も十分ではない。時間の制約もあり文章の推敲も不十分であるがとりあえず今後の研究へのひと区切りとする。

注

* 「第一に、コードリ以前の語学学習書、ラテン語辞書との比較、第二に、コードリと同時代のシェイクスピアの語彙を収録した Schmidt, A. *Shakespeare-Lexicon* との比較、第三に、コードリ以降の英語辞書、そして 20 世紀の学習英英辞書である *Oxford Advanced Learner's Dictionary* との比較いう 3 つの基本的視点から考察する」という考え方は、コードリをいろいろな視点から考察し、本稿がほとんど完成した時に自然発生的に生まれた表現である。言い換えるならば、辞書の発達も歴史学のひとつであるから、辞書を、編纂方法の変遷、そこに見られる編者の意識の変容、その意味では精神的に考察しようとしてきた著者の視点、方法論が本稿にも必然的に反映しているといえる。筆者が英語の歴史を考えると心に掛けてきた視点である。

- (1) シェイクスピアの劇は、棧敷席で観劇する紳士階級、法律家などの専門的職業に従事する人々もいたが、観劇よりもよからぬことの方に関心のある輩も多くいた。まして、中庭で立ち見をしている一般大衆は、けんかをする、野次を飛ばす、拍手や歓声を上げる者も多くいた(藤田実「エリザベス朝の劇場と劇団」p.180『シェイクスピアハンドブック』南雲堂、1987)、そんな観客を相手に書かれたシェイクスピアの劇作品中の語彙はおおむね一般大衆が理解である語彙であるはずである。

従来の辞書史研究は、辞書の歴史的発展という限られた視点からのみ研究されてきたようであるが、シェイクスピアが活躍していた正にその時期に出版されたコードリの辞書に収録された語彙とシェイクスピアが用いた語彙との比較は、十分研究に値すると思われる。

- (2) OED に引用された原典の指示が不正確な点がベーコンの『学問の進歩 (F. Bacon, *The Advancement of Learning*, 1605)』にもみられることはすでに拙著『英語の語彙史』第6章で指摘した。

OED に引用されているコードリを逐一検討したところ、OED のコードリからの引用の仕方は一貫性がなく、発行年と引用文に間違いさえ見出される。このことは、第一に、OED の編纂を開始した頃にはOED をジョンソンの改訂版を目的とし、今日目にするような大規模な、あるいは内容豊かな辞書にすることは視野に入れていなかった。従って、典拠となった原典の吟味が不十分であったこと。第二に、OED 初版編集の頃には、英語辞書学という学問分野はまだ十分確立されていなかった。例えば、英語史上の最初の辞書は John Bullokar, *An English Expositor*(1616) であると考えられており、コードリの辞書はまだ認知されていなかったことなどがあげられる(林哲郎、p.147)。

1930年にコケラムの辞書の初版(第一部のみ。1623)が復刻されている(*The English Dictioanrie of 1623* by Henry Cockeram, with a preparatory note by C. B. Tinker, New York; Huntington Press)。

この復刻版巻頭の編者 Tinker による PREPARATORY NOTE の冒頭の文は以下のようにになっている。

"Exactly which volume in the long history of English scholarship is to be called the first English Dictionary nobody can assert with any degree of confidence. Is it John Bullokar's English Expositor (1616) or Minsheu's Ductor in Linguas or Guide into Tongues(1617) or Henry Cockeram's English Dictionarie(1623)?" (p.vii)

この文章から 1930 年の時点でも英語史上最初の英語の辞書は確定していなかったことがわかる。

なお、この 1623 年の初版は第一部のみが出版された。初版のタイトル頁には 1626 年の再版（三部からなる）では削除された一文がある。

Being a Collection of the choicest words contained in the Table Alphabetically and English Expositor, and of some thousands of words neuer published by any heretofore.

つまり、コケラムは、先行するコードリとプロカーを大いに利用していることを明らかにしている。

OED 編纂途中の 1905 年に著わされたイエスベルセンの *Growth and Structure of the English Language* (1905, 1948⁹, p. 212) にはコケラム (Cockeram, *The English Dictionarie*, 1623) への言及はあるがコードリへの言及はないのもイエスベルセンは、コケラムを最初の辞書とみなしていた可能性がある。

OED にみられるコードリからの引用文は、初版（1604）と第 3 版（1613）のみが用いられ、しかも引用文における両版の区別が混乱している。この点も OED が当初厳密な原典の考証をしていなかったことと、辞書史学がまだ確立していなかったことを物語っている。この点は次稿で論じる。

- (3) 辞書のタイトルページには *hard* という語が頻繁に使われている。この *hard* の意味はいわゆる「難解な」という日本語が意味することとは違うのではないか。OALD には "*hard words, difficult for young learners or uneducated persons(in spelling or meaning)*" 「(つづり字、意味が) 年少の初学者あるいは無学の教養のない人々にとって難しい」とあって、一般的に誰にとっても難しいことを意味するのではない。

ちなみに、当時難解語と称された複数の音節からなる、長々しい難しい外来語を象

徹的に表現するために「インク壺言葉 (inkhorn term)」という語が用いられることがよくある。OED は、この表現を初めて用いたパトナム (G. Puttenham) を引用して、そのように読める解釈を与えている (irrevocable, irradiation, depopulation, & such like, ... which ... were long time despised for inkehorn termes, s.v., OED, *inkhorn term*)。しかし、パトナムの原典を直接調べてみると、OED に引用されている部分の後は以下のようにになっている。“, and now reputed the best & most delicat **[sic]** of any other.” (*The Arte of English Poesie*, 1589, rpt., Scholar, 1968, p.89)。また、この引用の同じ頁には以下の文章も見られる。“...the many polysyllables even to sixe and seuene in one word, which we at this day vse in our most ordinarie language”。つまり、パトナムのいう「インク壺言葉 (inkhorn term)」というのは「(1500 年) 以前に借用され、長い間「インク壺ことば」として軽蔑されてきたが、今では英語に溶け込んでいる洗練された語」つまり「借用語ではあるが 100 年以上以前に借用され、16 世紀後半当時には英語に溶け込んでいる日常語」と読める (この点も次稿で論じる)。

- (4) 三輪伸春「近代英語辞書におけるギリシア語借用語」、『中野弘三博士還暦記念論文集』、1995、英潮社、pp.596-604、参照。

参考文献

(寺澤芳雄編『英語学文献解題』第 8 巻, 2008、に詳細な文献リストがあるので、ここでは直接関係する文献のみをあげる。また、OED については、元版、第 2 版の区別は本稿では重要ではないので表記上の区別はしていないがすべて第 2 版の CD-ROM version3.1 による)

Cawdrey, R. *A Table Alphabeticall*(1604, Weaver), rpt. 1966, Scholar

Cowie, A. P. (ed.), *The Oxford History of English Lexicography*, 2 vols. , 2009, Oxford (ごく最近の出版で精読するには至っていないが、コードリ が 16 世紀の語学学習書のグロッサリと外国語辞書の伝統にもとづいていることを明記していること、従来よりは難解語辞書としての性格を強調していないことは筆者の見解に近いように思われる)。

Hornby, A. S. (with the assistance of A. P. Cowie & J. W. Lewis) *Oxford Advanced*

Learner's Dictionary of Current English, 1974, OUP, Kaitakusha

三輪伸春 「近代英語辞書の起源と発達－コードリから OED まで－（上・下）」鹿児島大学
学文学部紀要『人文学科論集』第 28, 29 号、1988, 1989

三輪伸春 「近代英語辞書の発達（上・下）」鹿児島大学学文学部紀要『人文学科論集』第
55, 56 号、2002, 2002

三輪伸春「近代における英語辞書」（『英語学文献解題』第 8 巻、研究社、2008、pp.6-21）

Schmidt, A. (revised and enlarged by G. Sarazin) *Shakespeare-Lexicon and Quotation
Dictionary*, 3rd ed. Walter de Gruiter, 1874

新谷美紀、*A Study on R. Cawdrey's Contribution to the English Vocabulary*, 2009 (unpublished)

津田佳織、*A Study on Cawdrey's A Table Alphabeticall(1604)*, 2009(unpublished)

